

難波西鶴

森田
雅也

前回、西鶴の「日本
永代藏」「元禄元(1
688)年刊」卷四の
四「赤の土蔵」を

らを用いて客に売るとは商売人として言語道断。天罰を受けたのか、利助の体はさらにむしばまれていきます。

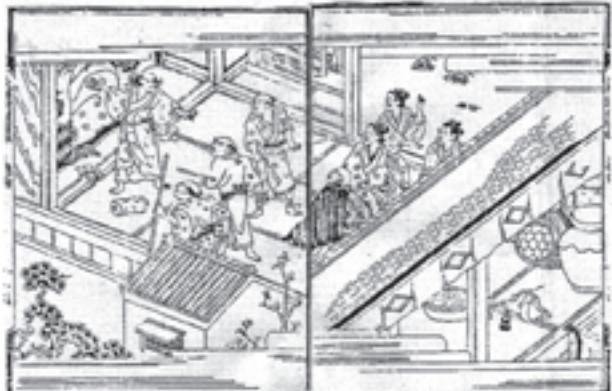
四「茶の十徳も一度は皆」の福井敦賀の「小橋の利助」は、茶がらを煮出して「えびす茶」として販売し、大もうけしながら、精神に錯乱をめぐらし、医者も見放す重病になつたといつとこまで紹介しました。

前々回までの利助は、無闇の振り売りの身から知恵才覚だけで大金持ちになるという、まさに商人のががみでした。ところが今風に言う「商品偽装」をやってしまったわけです。

「惜しむかなしや」
といふが未免もるも
付考、涙に紅の筋筋
あり、顔つわはざな
がく、角な青鬼の
「りん」。

角のない地獄の青鬼

〔33〕



関西学院大学図書館所蔵『日本永代藏』巻四の
四捕絵より

金銀にとりついた最期

利助は店の者に内緒で金庫の金銀を全部、足もとや枕もとに並べさせ、死に際にもかかわらず、穏やかな精神状態になる」とがでござる、「自分が死んだら、この財産はいったい誰のものになるのであるうか。考えれば残念だし悔しい」と、金銀にしがみつき、血の涙を流し、顔つぼはまるで角のない地獄の青鬼です。

「悪い」という醜態ですが、人に心を開かず、金もうけがすべての人生でしたから、利助らしい人生の終え方と言えるかも知れません。しかし、また暴れます。面影屋内を飛びめぐりて落ちる毛を、押し付ければよみがへりして、銀を尋ねる事三十四、五度に及べり。地獄の青鬼のような容貌の利助は家中を飛び回り、人々が押さえ込

かりき。
と、使用人たちも利助の病室に近づかなくなったり、台所に集まり、護身用の道具を持って身構えて、2、3日。やつと静かになつたので、皆で確認に行ぐり、すごい形相で金銀につけられたままになつてゐる利助の姿があり、人々恐怖で腰を抜かしてしまいました。

むどむづくと起業
上がり、「銀、銀」と言つて探し回る」
とが、三十四、五回
にも及び、後には、
下々も夢想つきて物
すこく、病家にゆく
人もなく、やうやう
台所に大勢集まり、
棒乳切木を手毎に持
ちて、身用心をして
二、三日も音のせぬ
時、あまた立ちかざ
りて見しに、金鏡
に取り付き、眼を開
きし有様、人皆魂な

「悪い」という醜態ですが、人に心を開かず、金もうけがすべての人生でしたから、利助らしい人生の終え方と言えるかも知れません。しかし、また暴れます。面影屋内を飛びめぐりて落ちる毛を、押し付ければよみがへりして、銀を尋ねる事三十四、五度に及べり。地獄の青鬼のような容貌の利助は家中を飛び回り、人々が押さえ込

かりき。
と、使用人たちも利助の病室に近づかなくなったり、台所に集まり、護身用の道具を持って身構えて、2、3日。やつと静かになつたので、皆で確認に行ぐり、すごい形相で金銀につけられたままになつてゐる利助の姿があり、人々恐怖で腰を抜かしてしまいました。